

## 学童期における自閉症スペクトラム児の遊びと対人的交流

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
飯田 真理子

子どもは対人的遊びの中で、人と心を通わせる体験をし、言語能力や想像力を育んだり、ルールなどを学んだりしていくが、自閉症スペクトラムの子どもは、対人的遊びを苦手とし、遊びの経験が少なく、それら諸能力の獲得を妨げられている。本研究では、学童期の自閉症スペクトラム児の対人関係に着目し、特徴的な遊びと対人的交流を、場面との関係から明らかにすることを目的とした。

研究では、自閉症スペクトラムの学童3人を対象児とし、療育のごっこ遊び場を3ヶ月分使用して、ビデオ分析した。分析にあたっては、ごっこ遊び全体を、4場面にわけた。

研究1は、遊びの特徴を明らかにするため、各児童の「場面別の遊び方」を分析した。その結果、全ての児童が導入場面からそれぞれイメージをもって遊んでいた。遊びの中にゲームが加わると、イメージ力の発達した児童は役のイメージをもってゲームに取り組むことができたが、そうでない児童は「ゲーム」として楽しむことになっていた。場面が変わり、作りこまれた環境での遊びになると、自分のイメージを発展させて遊びだし、力の弱い子どもでも、部分的に捉えた要素に基づいて想像遊びを始めた。そして、遊びの終了場面ではごっこ遊びの収束のさせかたにも違いがあることが明らかになった。

研究2では、子どもの対人的交流を明らかにするため、各場面での子ども間のやりとりを取り出し、「共鳴的關係」、「対立的關係」、「一方向的關係」に分類した。

「導入場面」では、各児が自分のイメージに向けて遊んでおり、他児と遊びを共有しようとする動きは少なく、働きかけは一方向的關係になりがちだった。「遊び1の場面」では、ゲームに熱中し他児の動きに気づかなかったり、順番を争って対立したりしていた。「遊び2の場面」では、場の雰囲気、他者と関わりたいという欲求を刺激したり、遊びの共有を補助したりするため、部分的に共鳴的關係が成立していた。「終了場面」では、終了作業に夢中になり、やりとりがなくなっていた。

自閉症スペクトラムの子どもたちは、遊びが始まると同時に独自のイメージを持ち、ごっこ遊びやふり遊びをしていた。整った環境下では、その影響を受けて遊びを発展させ、シナリオに沿った遊びや他者との関わり遊びをしており、環境は、イメージの共有や共鳴的關係での対人的交流の成立を容易にしていた。大人の関わりも子どもの遊びに影響するとみられ、その役割を遊びの展開や場に合わせ検討する必要がある。